

何事もタイトルが勝負！——最近の2冊の本から——

「九十歳。何がめでたい」 (佐藤愛子著)



新聞広告によれば本年前半のベストセラーだという。まずタイトルが刺激的だ。タイトルの付け方がいかに大事かを教えた本とも言えるだろう。

本文中のタイトルの工夫もある。「こみ上げる憤怒の孤独」「来るか？日本人総アホ時代」「一億総評論時代」「思い出のドロボー」「老残の悪夢」「いちいちうるせえ」・・・など、少し衝撃的でなんとなく読みたくなる見出しだ。それと文章の切れ味の良さ。自分を笑い者にする書き方も読者に快さを贈っているのかもしれない。

共感した何点かを書き抜いてみると：

- ✓ (スマホ等、新しい器械がどんどん出てきて年配者はそれが使えないことに対して) 年寄りが敬意を払われなくなったのは、この急速な「文明の進歩」のためだ。私はそう思っている。
- ✓ 文明の進歩は我々の暮らしを豊かにしたかもしれないが、それと引き替えに、かつて我々の中にあつた謙虚さや感謝や我慢などの精神力を摩滅させていく。もう進歩はこの辺でいい。更に文明を進歩させる必要はない。進歩が必要だとしたら、それは人間の精神力である。
- ✓ 離婚は女の恥ではなくなって、新しい未来への出発点となった。思わぬ妊娠をしても必要に応じて処置が出来る。「私生児」という陰湿な言葉はなくなって輝かしい「未婚の母」という名称が生まれた。・・・
- ✓ ああ、長生きするということは、まったく面倒くさいことだ。耳だけじゃない。目も悪い。膝から時々力が抜けてよろめく。脳みそも減ってきた。そのうち歯も抜けるだろう。なのにまだ私は生きている。



かようにズケズケと思うまを綴ったところに、同じような気持ちを抱いている高齢者また一般読者の共感を得たのではないか。

「宝くじで1億円当たった人の末路」 (鈴木信行著)



この本もタイトルで売った、少なくとも自分の関心を引き寄せた本である。

「1億円も当たったら人生が狂ってしまう」「働かないで得たお金はあぶく銭だ。すぐになくなってしまおう」と信じ、超幸運にも当たった人を羨み(名前も報道されないから誰かわからないが)、そんな人が事件に遭遇したり不幸になつたりすると”ああ、やっぱり”と安堵というか、人の不幸を喜ぶようなさもしい心が出てきそうな予感みたいなものもあった。

特に「末路」という語は否定的な言葉で、一般に不幸に陥った人の終末みたいなイメージがある。著者もこの言葉をタイトルに使うのに勇気が必要だったのではないかと推測もするのだが・・・

本書は日経ビジネスの副編集長が、各テーマの専門家にインタビューをしてまとめており、一般には知り得ない世界を知るのに参考にはなった。インタビューを記事に続いて著者の「結論」と「解説」を書いているのも問題の本質を理解しやすくしている。

「末路」の例として「事故物件を借りちゃった人の末路」「キラキラネームの人の末路」「子供を作らなかった人の末路」など 24 事例を取り上げているが、後半はどうでもよいようなテーマも多い。その中で最初の事例「宝くじで 1 億円当たった人の末路」を本自体のタイトルにしたのは読者の覗きみ趣味を刺激し秀逸だった。まさに佐藤愛子氏と同じように「本（物事）はタイトルが勝負」が実感される。

以下、気になった部分を何点か：

- ✓ 「宝くじは当たったら当たって、ろくなことにはならない」と公言するマネーの専門家がいる。まずポピュラーなのは、家族・親族内トラブルだと聞きます。家族はもちろん、それまで縁遠かった親族までが直接・間接的に“おすそわけ”を要求してくる。家族の間でも、お金以外の話題が食卓の会話に出なくなる。
- ✓ 「急な富裕化」というのはそのぐらい危険なことで、例えば米プロバスケットボール NBA を引退した人の 60% は 5 年以内に破産しているというデータもあります。
- ✓ 「お金を貯めようと必死になっているときは楽しかったに、いざ、一生かけても使い切れないお金を手にしてしまうとつまらない」といった話を聞かされます。なるほど、宝くじは「人生のやる気を失う」ことにもつながりかねない。
- ✓ 「結論」——宝くじで 1 億円当たった人の末路は？ → 一家離散、貧困化、人生の目的喪失・・・ろくなことはない。
- ✓ トラブルを回避するためには、税理士、弁護士に相談。次に複数の金融機関に相談し一緒に資金プランを立て、今の生活を変えないことです。もちろん仕事を辞めてはいけません。人との付き合い方も変えてはいけません。この部分をしっかり押さえておけば、宝くじが当たってもまず大丈夫です。
- ✓ 経済学の世界では「宝くじ＝愚か者に課せられた税金」と定義する人もいます。



そして本の最後のページの「おわりに」で綴っています。

——お金なんて、必要最低限あればいいんです。「宝くじで 1 億円」当たっても、ろくなことはないですから。

これが結論のようです。でも、私も「〇〇〇のお金があれば・・・」と時々、少額ながら宝くじを買ってしまう。まさに“夢を買う”んでしょうね。本稿をお読みになった皆さまはいかがでしょうか？